

Campus News

キャンパスニュース

 長野大学
NAGANO UNIVERSITY

100号
2014 1月号

特集 学生×先生



長野大学の 願いと決意。

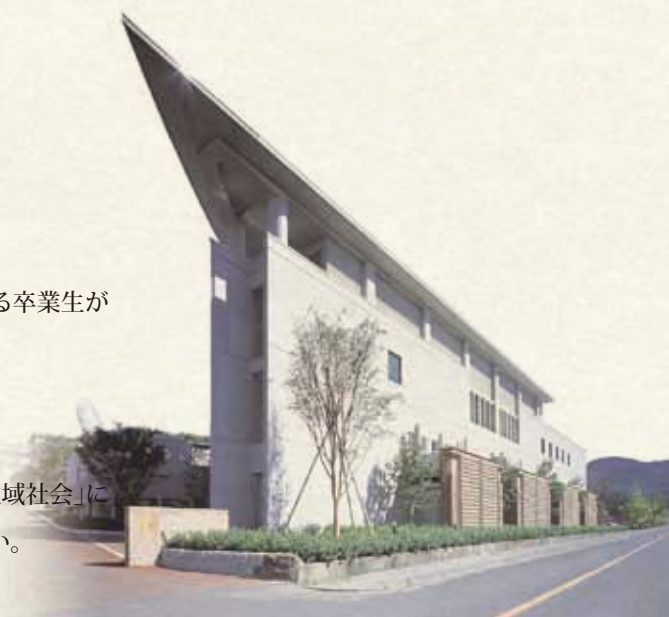
長野大学は2016年(平成28年)に設立50周年を迎えます。

この間、地域で活躍できる人材育成に取り組み、これまでに12,000名を超える卒業生が社会で活躍しています。

今日の日本社会は、少子化と若者の大都市集中傾向により、地方は過疎化、社会・経済の担い手不足、就業機会不足に悩まされています。

この課題に対し本学は、グローバル化した世界を見据えながら、あくまでも「地域社会」に焦点を定めて、このような地域社会に貢献できる若者育成の拠点を構築したい。

これが50周年を迎える本学の願いであり、決意です。



地域の思い カタチに。

長野大学は、人口16,000人余りの旧塩田町による、7,000万円の出資と10万坪の土地の提供を受けて、自治体の100%出資による全国でも先駆的な「公設民営」方式による4年制私立大学として、1966年(昭和41年)に設立されました。

沿革

- 1966年(昭和41年) ● 本州大学経済学部経済学科を開学
- 1974年(昭和49年) ● 大学名を長野大学に改称し、産業社会学部産業社会学科・産業社会学部社会福祉学科に改組
- 1988年(昭和63年) ● 産業社会学部産業情報学科を開設
- 1993年(平成5年) ● 生涯学習センター(現在の地域連携センター)設立

- 1997年(平成9年) ● 開学30周年記念事業として9号館(図書館)竣工
- 2002年(平成14年) ● 社会福祉学部社会福祉学科を開設
- 2007年(平成19年) ● 産業社会学部を改組し、環境ツーリズム学部環境ツーリズム学科・企業情報学部企業情報学科を開設
- 2008年(平成20年) ● 長野大学憲章制定
- 2016年(平成28年) ● 開学50周年



教育の「なかみ」の改革

私たちの生きる社会はますます複雑になり、未来はさらに不確かなものになっています。このような社会では、「自ら学び」、「自ら考え」、「主体的に判断する」ことがより必要になってきています。けれどもこれまでのように、知識を独占する教員が何も知らない学生に教えるという関係を前提にした講義を中心の「知識刷り込み型」の教育では、この社会からの要請に応えることができません。大学に入学してくる多くの若者たちも、この「知識刷り込み型」の教育に慣れ、あるいは疲れているように思われます。

“協働学修型” の教育へ

そこで長野大学では、様々な事例にも学びながら、今日の社会にふさわしい教育のあり方を何年にもわたって模索してきました。そこでたどり着いたのが、学生と学生、学生と教員が、共に分からない未解決の問題に協働して取り組み、できなかったことができるようになる欲びを共に分かち合う「協働学修型」の教育への移行です。

この「協働学修型」の教育を可能にするのが、「自分の考えを述べ」、「他者の意見を聴く」ことを通じて、それぞれが思いがけない「視野の拡大」を経験する「対話的討論」という方法です。この「対話的討論」による未知の問題の解決という方法は、教員を囲んで、メンバーの固定した、少人数の特定の学生集団を、持続的に維持していくことで可能になります。本学では、ゼミナール中心の少人数教育を前面に掲げていますが、それは、この「対話的討論」を何よりも重視するからなのです。

このような「対話的討論」の訓練を積むことによってこそ、自分が直面している課題に対して、何かがおかしい、なんとなく違和感があるという、その「感じ」を自らの力で明晰に言語表現できる人材の育成が可能になります。

地域社会から必要とされる人材に

日本も、我々の住むこの地域社会にも難題が山積しています。このとき「対話的討論」の訓練を通じて、漠然とした問題の所在を明晰に言語で表現できるようになった人材こそ、真に地域社会に必要な人材だと思うのです。そしてこうした人材こそ、困難に直面しても「打たれ強い」人材だといえるでしょう。2016年(平成28年)に50周年を迎えるにあたり、長野大学は、一方通行の「知識刷り込み型」の教育から、「対話的討論」を基にした「協働学修型」の教育へと大きく舵をきり、真に地域社会から必要とされる人材を育成するために、さらに大きな一歩を踏み出す決意しております。



その地域で暮らす“人”に興味を持ってほしい。

「地域福祉」を学ぶうえで私が一番重視しているのは「地域のニーズを知ること」だと考えています。そこで、地域に求められている情報や課題を見つけて、ラジオ番組を制作・放送する取り組みを開始しました。番組の制作にあたっては、社会福祉の仕事において必要とされる「連絡」「相談」「調整」が欠かせないので、学生たちがめざしている福祉の仕事にも役立つと考えています。企画・構成からトークまで全てを学生が行う番組は、地域リスナーにも好評で「もっと話して」というメッセージもいただいています。これからも学生たちと共に番組制作を通して「地域福祉」についての考え方を深めていきたいと思います。

ラジオ番組を作っていたら、 いつのまにか地域が好きになっていました。

先生から番組の企画に取り組んでみないかと言われた時の素直な思いは「どうして福祉を学んでいる私たちがラジオ番組を作るの？」でした。放送時間は1時間。テーマが1つでは時間が持たない。選曲ってどうやるんだろう…。いろいろなテーマをゼミの仲間と考えると「あ、地域の人の役に立つ内容を考えている。先生の言っていた地域福祉の原点ってこれかも」と思えるようになりました。自分たちが何を伝えたいのか話し合いを重ね、アンケート調査をし、季節を感じるテーマ、イベントの情報提供など、意見が出るようになりました。最近では、「福祉現場で働いています。学生さんも頑張ってください。みなさんのトークに励まされています」と応援メッセージをもらうこともあり、番組の制作が楽しくなっています。リスナーに分かりやすくメッセージを伝える大切さは福祉の現場でも役にたつと考えています。

学生

社会福祉学部3年
長野県小諸高校出身
掛川 涼香

先生

社会福祉学部
中村 英三
教授

社会福祉学部 学生 × 先生

コミュニティ放送局で ラジオ番組を制作



ラジオの生放送。 声だけでも“思い”があれば伝わる

中村ゼミナールでは、地域に密着した情報を発信するコミュニティFM「エフエムとうみ」（長野県東御市）とコラボして、ラジオ番組の制作をしています。番組名は「次世代VOICE」。大学生の“生の声”を届けたい、知ってほしいという思いが込められています。月に1回、1時間の生放送は、入念な打ち合わせと準備なしではできません。「伝えたいことは何か」を常に考えながら準備しています。



1 アンケート調査

学内でアンケートを取り集計。放送するテーマのひとつになります。



2 企画会議

アンケートのテーマの他に取り上げたいテーマ・話したい内容の企画会議を開きます。



3 プロデューサーと打ち合わせ

番組のプロデューサーと構成、企画内容・当日のスケジュールを確認。



4 オンエア

いよいよ本番、テーマにそって1時間の生放送！

被災地に貢献したい長野県民

× 里山を再生したい宮城県民＝里山再生

「たねぶろじえくと」では、被災地で採取した種子から地域性苗木を育てています。どの種類の苗木を育てるか、宮城県山元町で奇跡的に津波に流されることがなかった海岸林で植物調査を実施し、津波後も枯れずに生き残った樹木を調べることによって決めました。現在、コナラなどの広葉樹を中心に、26種類493本の苗木が小学生と大学生の手によって育てられています。第1回目の植樹祭は、2016年の春に宮城県山元町で開催する予定です。その後、豊かな森林へと成長するまでにかかる年月は、30年以上。学生たちが将来、自分の家族や子供を連れて30年後に行ってみたくなるような森づくりを学生たちと一緒にやっていきたいです。

未来を担う若い世代の“協働”による苗木を生産中。

「被災地の里山再生のためには何ができるのか…」この課題に挑むため、私たちは宮城県山元町へ視察に行くことから活動を始めました。海岸林調査では、私の背丈ほどもある草木をかき分けの作業がとても大変でした。海岸林は大津波の被害で著しく破壊されたため、幹が倒されたり、枯れたりしたマツが目立ち、心が痛みました。調査中に、被災したと思われる子どもたちが写った集合写真を見つけることもあり、切ない気持ちになりました。大変なことも多いですが、「被災地の里山再生のために」という初心を忘れずに活動しています。「たねぶろじえくと」では、将来にわたって震災復興に関わってくれる子どもたちを対象に「環境教育プログラム」を学生たちで開発し、実践しています。どのようにしたら、子どもたちが苗木づくりや里山に暮らす動植物について興味を持って、震災復興に貢献したいと思う気持ちが高まってくれるのかについて、ゼミナールの仲間たちと議論を重ねています。プロジェクトに関わった子どもたちが、自然環境を大切にする大人に成長できるようなきっかけを作りたいと思っています。

先生

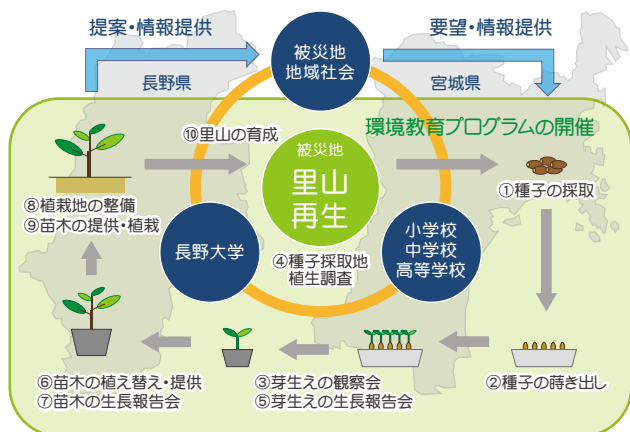
環境ツーリズム学部
高橋 一秋
准教授

学生

環境ツーリズム学部3年
長野県 須坂高校出身
熊井 沙緒理

環境ツーリズム学部 学生×先生

希望のタネから里山再生 「たねぶろじえくと」



森林や里山、子どもたちを
時間をかけ、育てていきたい。

「たねぶろじえくと」は、高橋一秋ゼミナールの呼びかけにより、2013年4月にスタートしました。東日本大震災の大津波で流されてしまった森林や里山を再生するために、長野大学と宮城県・長野県の小学校が協力して、被災地で採取した種子から苗木を育てています。参加小学校で年に3回開催される「環境教育プログラム」では、苗木の育て方や森林に暮らす動植物の生態、人間にとっての森林の役割について学びます。被災地を思いやれる「温かみのある人間力」を育てることも活動のポリシーです。



1 育てる樹木を学ぶ

大学生が企画した「環境教育プログラム」で、これから育てる樹木の種類や生態を学びます。



2 種子の採取

里山の動植物について学んだあとに、里山に行き、種子を採取します。



3 種子の蒔き出し

小学校でプランターに種子を蒔き、水を与えます。その後、芽生えの生長を観察します。



4 苗木の植え替え

生長した苗木を徐々に大きな植木鉢に植え替え、被災地での植栽に備えます。(現在20~40cmくらいに育っています。)

自分の目で見て、感じることからデザインは始まる。

半年かけて取り組んだ「バスの車体デザイン」のプロジェクト。完成したバスを初めて見たときの学生たちのいきいきとした表情は忘れることができません。プロジェクトが始まったころ、研究室には学生たちが常について、みんな必死になってデザインをしていましたね。

でもデザインをする前に本当に必要なことは、「現状を知ること」でした。そこから学生たちは、バスの利用状況や地域の方への聞き取り調査など、一見するとデザインと関係の無さそうな活動を始めました。自分の目で見て、聞いて、感じたことをカタチにしていく。大変なことだからこそ出来上がったときに作品に愛情が生まれ、「デザインっておもしろい」という思いが分かるんです。

本気で取り組んだから悔しかった。でも納得。

考えたデザインを先生に見てもらったとき、「こんなバスには乗りたくないね…」と言われました。悔しいというより、理由が分からず「なぜ…？」という感じでした。プロジェクトが進んでいく中で、地域の方に協力していただき、バスの歴史や現状を調べました。その結果を研究室に持ち帰り、学生同士で意見交換しながら、「地域の人にとって魅力的なデザインとは何か」と考えました。1次選考、学内投票と審査が進み、私のデザインは落選してしまいましたが、さまざまな人の協力を得ながら必死に考えたデザインだったので、やりきった達成感がありました。

最終的に採用された先輩のデザインは、「私よりもさらに深くバスの抱える課題を考えて作ったんだな」と納得できるデザインでした。私にもまだまだ良いデザインができるはず！今回の経験でデザインに対する考え方を広げることができたと思います。

学生

企業情報学部4年
長野県
エクセラン高校出身
宮田 佳美

先生

企業情報学部
禹 在勇教授

企業情報学部 学生 × 先生

バス会社との デザインプロジェクト



「街を元気にするデザイン」
そのヒントはやっぱり“街”にある

禹ゼミナールとデザインサークルの学生は「デザインで街を元気に！」を活動のポリシーにしています。

上田バスと連携して取り組んだ「バスの車体デザインプロジェクト」では、地域の利用者の声や利用状況など、現場の調査を徹底して行いました。

そんな学生たちの提案の中から「貸切バス」と「路線バス」が誕生し、上田の街の中をさっそうと走っています。



1 プレゼンテーション

プロジェクト内でデザインを提案し、メンバーから意見やアドバイスをを受け、デザインを改良しました。



2 第1次選考会

改良を加えた40作品を上田バスの社長と関係者に提案しました。



3 学内投票

第1次選考を通過した11作品を正面玄関に貼り出し、学生と教職員に、投票してもらいました。



4 最終選考会

11作品の提案を行い、デザイン候補が決定しました。

監督の特権は、選手たちが起こす “奇跡”を一番近くで見られること。

北信越大学リーグ戦大会での大事な試合。接戦でしたが、連戦の疲れが見え始めた秋葉さんの交代を決断し、タイムアウトを取ったときのことです。交代を告げると、秋葉さんが「このまま私を使ってください」と訴えてきました。結局、交代を取り消し、再びコートに送り出しました。勝利への決意だけでなく、チーム内での責任を果たそうとする、人としての成長を感じた瞬間でした。試合は最後の最後までもつれましたが、セットカウント3対2で勝利し、リーグ戦全体を通して4勝1敗と北信越大学リーグ戦大会で過去最高となる準優勝という成績を修めることができました。

監督と話す回数が増えれば、 もっと勝てるようになるかも。

監督とはバレーボールのことだけでなく、いろいろな話をします。北信越大学リーグ戦大会でのあの一戦。コートの中では「このメンバーで戦い切ろう」と決めていました。だから自分の交代を告げられたとき、はっきりと自分の思いを監督に伝えました。大会の前にも監督とは言い合いのケンカをしたことがあります。でもそんなことを重ねながら時間をかけて築いた信頼関係だから、厳しい練習でも「北信越にある大学で一番強いチームになりたい」という同じ目標に向かって頑張れるんです。

監督

社会福祉学部
野口 京子 教授

ロサンゼルス五輪
女子バレーボール
銅メダリスト

選手

企業情報学部3年
東京都文化学園大学
杉並高校出身

秋葉 夏海

選手 × 監督

強化指定部 女子バレーボール部

「自分たちの好きなことができる」って 楽しいけど、難しい。

長野大学リーダーズクラブは、子どもを対象にしたイベントの企画運営や、福祉施設等でのボランティアを行うサークルです。毎年12月に地域の小学生100名ほどが参加して行うクリスマス会は、地域の恒例行事として定着し、楽しみにしている子どもたちがたくさんいます。レクレーションやクリスマスをテーマにした劇の準備は夜遅くまでかかることもあります。準備の過程では、私たち上級生の経験と後輩たちの今までにない発想が大切です。意見を出し合える雰囲気があれば、良い企画になっていきます。学生だけで企画から運営まで行うので、自分たちが「やりたい」と思ったことができる反面、安全で楽しめるイベントの実現には責任も伴いプレッシャーもありますが、最後に子どもたちの笑顔が待っていると思うと頑張れます。

先輩たちが背中教えてくれる。

昨年初めてクリスマス会に関わって、突発的な行動をする子どもたちの対応に苦戦しました。立入禁止となっているステージに上ったり、学生スタッフを靴で叩く子どもがいたり、どのように対応したらいいかわかりませんでした。そんなとき先輩が毅然と注意をしている姿を見て「すごい!カッコいいな」と思いました。子どもたちに、これまで以上に楽しいと思ってもらえるイベントになるよう地域での活動を通じて、多くのことを学んでいきたいです。

後輩

企業情報学部2年
長野県 赤穂高校出身
伊沢 明大

先輩

社会福祉学部3年
長野県 野沢南高校出身
土屋 里咲

後輩 × 先輩

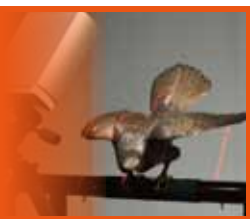
ボランティアサークル リーダーズクラブ

NEWS&TOPICS 長野大学の最新情報をチェック!

日本学生支援機構「優秀学生顕彰」において
7年連続受賞しました

企業情報学部4年の松田宗さんが、日本学生支援機構が実施する「平成26年度優秀学生顕彰」の「学術分野」において優秀賞を受賞しました。

優秀学生顕彰は、学術・文化・芸術・スポーツ・社会貢献の各分野で優れた業績を挙げた学生に対して、これを奨励・支援し、21世紀を担う前途有望な人材の育成を支えることを目的としています。受賞者には、オリンピック出場選手など「21世紀を担う前途有望な人材」が揃います。

平成26年度
学術分野
優秀賞「文化財等をCGで高精度に
デジタルアーカイブする技術の開発」

文化財の劣化状態を分光分析に基づいてCG再現できるようにし、また、古い工芸作品を高精度にデジタルアーカイブする技術を開発しました。この技術を用いて、明治期の彫金作品「十二の鷹」のデジタルアーカイブと材質分析を行いました。

企業情報学部4年 長野県長野西高校出身 **松田 宗さん**



私の研究は文化財をCGで忠実にデジタル記録するものです。文化財は紫外線、酸性雨等により、自然と劣化していき、また災害等により傷つき、失われることもあります。この研究がさらに進めば、後世に現時点での状態で記録した文化財を残していくことができます。今年は「十二の鷹」を所蔵している東京国立近代美術館の方と共同で研究をさせていただき、貴重な経験をすることができました。実用化していくまでには、まだまだ課題がありますが、ゼミの仲間や先生がいたからこそ研究をここまで進めることができたと思うので、感謝の気持ちを忘れず研究に励んでいきたいです。



東京国立近代美術館で「十二の鷹」を計測する松田さんら



CGによる再現結果

編集後記

「キャンパスニュース」の第1号を振り返る

今回でキャンパスニュースが100回目の発行となりました。1990年7月に大学の情報を高校生や地域に向けて発信することを目的に、年間2回の発行で始まった「キャンパスニュース」。

第1号には、当時の学長のインタビュー、ゼミナールやサークル紹介、就職内定者や社会福祉士合格者の体験記などの記事が掲載されていました。25年が経過した現在は年間10回発行しており、長野大学の“今”を伝える情報誌となっています。

